20221002 レムナント教会 1 部

残念な後悔と必要な後悔(マタイ 27:3-10)

イスカリオテのユダはイエス様の弟子の群れに加わりましたけれども、最初からイエス様をキリストとして従っていたわけではありません。自分の野望、欲望を満たすための絶好のチャンスだと思ったでしょう。しかし、イエス様が結局、十字架で死なれるという話をしていらっしゃったので、これは私の勘違いだったのか。もうこれ以上、この人に用はないと思って、最後にイエス様を裏切ります。今まで自分の願いとは全く違う方向に行っていたので失望しがっかりして、最後イエス様から離れるときにイエス様をパリサイ人に売ってイエス様から離れました。そのときに銀貨 30 枚をもらったそうです。銀貨 30 枚は畑を買って、そこを結構なおうちにするくらいの値段になるものだったみたいです。その後、イエス様は逮捕されて、結局、死刑になりそうだという雰囲気を読み取って、イスカリオテ・ユダは自分の良心に刺さることになりました。イエス様をキリストだと信じていないのに、ただ自分がやったことが罪のない人を自分の動機によって売り出してお金は儲けることになりました。その人がある意味、冤罪で自分のせいで死刑になるということを考えたときに、これはいかんと思ったのでしょう。イスカリオテ・ユダはそういう意味で良心的な部分が結構あり、最後にはそれがとてもデリケートに動かされていたのではないかと読み取れます。それで、その良心の呵責に耐えきれなくてパリサイ人の方に行き、「私が罪を犯した。罪のない人間を売り出したんだ。だからこの銀貨を返しますよ」と言ったら、そこのパリサイ人たちが、「いや、私たちとはもう関係ない。終わったことなので、お前が始末しろ」と追い出したわけです。すると、ユダは銀貨を神殿に投げ込んで、良心の呵責の末、それに耐え切れなかったので、自分で首を吊って命を絶ってしまいます。そのときまでイスカリオテ・ユダは自分がやったことに対して非常に後悔の念をもって、それをどうにかしようと思いましたが、イエス様をキリストと信じることはありませんでした。良心的な後悔、道徳的な後悔の道を走っていたわけなのです。その結果、今日私たちが見ているとおりに自分で自分の命を絶ってしまう、そういう残念な後悔で終わってしまったということが聖書の記録なのです。私たちは良心的になり、その自分の良心に敏感になって、良心に基づいて素直に後悔をして反省すればそれでいいというふうに思います。もちろん悪いことではありません。図々しくなるよりそっちの方が賞賛され評価されるかもしれません。しかし、私たちが今日目撃しているとおりに、それは残念な結果になりました。それが人間に本当に必要な後悔なんでしょうか。そうでなければ人間にとって本当に必要な後悔、その人の人生をがらりと根本から変えることができる後悔というのはあるのか、あればどのような後悔なのか、ということを問いかけないといけません。そこで今日、神様からその答えをいただきたいと思います。

まず、今日の聖書の箇所、特にユダがやっていることを通して、第一に、人間の良心的また道徳的な後悔は人の根本を変えることはできないんだ、ということが分かるわけです。それを肝に銘じましょう。誰でも大きいか小さいか、あるいは多いか少ないか問わず、何らかの後悔というものはあるものなのです。人間というのは誰にでも後悔はあります。自分自身に対しての後悔もあります。また、家族に対して、子供に対して、親に対して、あるいは他人に対して、やったことに対しての後悔というものも残ります。また、人生を生きてゆく中で何かを選択しないといけない場面で間違って選択してしまったいうことに対する後悔もあるでしょう。また、場合によっては感情のコントロールがなかなか効かなくて、それでしでかしてしまったということも結構あります。そうしちゃいけないとわかっているのにもかかわらず感情がなかなか押さえられず、それがいろんな形に現れて失敗してしまったという後悔もあり、さまざまな形の後悔が人それぞれにあるはずなのです。しかし、そのような後悔が良心的な道徳的な後悔になる場合は、二つの道があります。

まず第一に、その後悔そのものに押しつぶされて倒れてダメになってしまいます。それが後悔が行く道なのです。今日、聖書から見られるユダの後悔がそのような後悔です。なぜなんでしょうか。良心的な道徳的な後悔というものは、間違ってるんだという反省はあるかもしれませんけれども、その後悔せざるを得ない間違ってしまったその過去は変えることができません。なので結局、その後悔というものに押しつぶされて耐えることができない状態に自分を持って行くようになるのが良心的な後悔、また道徳的な後悔というものなのです。それからもう一つ、その後悔ゆえに反省とともに、とに

かく前向きに進もうという動きがあります。ある人が理由が何かわかりませんけれども人を殺めて刑務所に入りました。そこでその人は自分がやったことに対して後悔をして、この刑務所から出たときには絶対に人を助ける人の役に立つ人間になるんだと決心した。これが道徳的な良心的な後悔です。世の中ではそれが評価されます。また、後悔はそういうものじゃないといかんというふうに言われているところがこの世の中なのです。また、自分がやってしまったことでなくても後悔があるんですね。何かの災害により自分の周りの人間がみんな被害を受けて亡くなってしまったのに、なぜか自分一人が生き残ったのかということで、最初はほっとするのですが少し時間が経って冷静に考えてみると、「なぜみんな死んだのに私だけが生き残ったのか。先に亡くなった人に対して申し訳ないな」という気持ちに駆られるのです。特に日本人の場合は。それが一つの後悔になって、それに押しつぶされて生き残ったにもかかわらず死んでしまう人もいます。それが先ほど申し上げました押しつぶされるというケースなのです。しかし、そこでそれをバネにして「よし、先に亡くなった人の分まで自分で一生懸命、精一杯生きて行くんだ」と決心する場合もあります。それが良心的な道徳的な後悔の一つの道になるわけです。ある人は戦争に行って一緒に戦っていた同僚がみんな死んで自分一人がそこで生き残って故郷に戻ってくる場合があります。生き残ったのでホッとしてありがたいなという思いがあると同時に、「なんで私一人が生き残ったのか。みんな犠牲になったのに」という思いで何か罪責感みたいなものを背負うようになります。それで押しつぶされる場合と、もう一つは「そうか先に犠牲になった同僚、戦友の分まで私は精一杯残りの人生生きていこう」という場合があります。それが道徳的な良心的な後悔の最高のレベルなのです。しかし、ここでクリスチャンの私たちは冷静に考えなければいけません。押しつぶされることは残念と思うでしょうけれども、それを反省するとともに前向きに一生懸命生きようとすることには拍手を送るかもしれません。しかし、冷静に考えてみると、前向きに精一杯生きようとすることも根底にはその呵責による負い目というものを抱えているからそういうふうになるわけです。つまり、押しつぶされることでも前向きになることでも良心的な後悔、道徳的な後悔というものは、後悔の念とともにを負い目を抱えることに変わりはないわけです。その負い目、後悔せざるを得ない負い目から自由になることは絶対ありえません。それが良心的な後悔、道徳的な後悔の限界というものなのです。そこを今日のユダの姿を通して冷静にまた正確にクリスチャンとして確認して行かないといけません。でもそこ止まりなのです。世の中ではそれ以上はありません。期待もできないし、それが精一杯の後悔というものなのです。しかし、それは限界があるもので、結局はその人の根本を変えることができないし、人生を根本から新しくすることなどもできません。それで前向きに頑張ったとしてもを負い目を背負って頑張るわけですから、人生終わる頃にはボロボロになる人がほとんどなのです。人のキャラクター、性格によってちょこちょこ変わる部分はあるかもしれませんけれども、基本的にそういうものなのです。どうしましょう。でもそれしかないから。聖書は私たちに教えて、また訴えています。道徳的な良心的な後悔は、人を根本から新しくすることはできません。負い目から解き放たれることなどは期待できません。

なので、人間に絶対必要な後悔は霊的な後悔です。聖書が神様が人間に求めていらっしゃる後悔は、そして、人間に許される祝福の後悔は、霊的な後悔なのです。霊的な後悔とはいったい何でしょうか。どんなことなんでしょうか。それは人間が初めて真面目に神様の前に立って悔い改めることを霊的な後悔と言います。たとえ教会に通っているとしても、本当に真心から素直に神の前に立つことがほとんどないという人もいます。それでも教会に 20 年、30 年通うこともありなのです。しかし、霊的後悔というものは、神の前に素直に立って悔い改めることです。神様は最初、人を神のかたちに造られました。それはどういう意味なのかと言いますと、宇宙万物すべての被造物を造られて、その真ん中に特別に人だけが神様がともにおられ、神様と交わることができる霊的な存在として造られたということです。つまり、人間はほかの被造物にはない地上を生きているのですが、主がともにおられ天国を歩けるそのような存在として造られました。地上にいるのですが天国を味わい、天国を歩く者、それが本来の人間という存在です。そのように造られました。つまり、人はほかの被造物とは比べることができない一番美しい一番幸せな存在として、特別な計画の中で造られた者なのです。なのに人はサタンに騙されて罪を犯して神様を離れることで天国から地獄に引き落とされることになりました。本当にそうなんでしょうか。人間は生まれながらこの地獄に引き落とされたままの状態で生まれるので、その感覚さえ持つことができません。だから、神の恵みによって聖書の御言葉を通して初めてその真相がわかるようになります。天国から地獄に引き落とされた人間は、ヨハネ 8：44「あなたがたは、あなたがたの父である悪魔から出た者」であるというふうに言われる存在に、神を父と呼ん

で天国を歩いていた者が、悪魔を父、親として人生を送ることになりました。エペソ２：1-3 には、自分の罪と罪過によって死んでいた者であり、空中の権威を持つ支配者、悪魔、サタンに従い、世の流れに流されて生まれながら神の御怒りを受けるしかない存在として生まれたとあります。誰がなんでしょうか。すべての人は罪を犯したので、神からの栄養を受けることができない。これが人間の実情です。道徳的に素晴らしい人間。社会に貢献する人。良い子、良い子と言われるような人間がいるから人はそれぞれ違うだろうというふうに思うかもしれません。そこからクリスチャンが勘違いするわけです。人は地上を歩きながらも地上の何かによって評価される存在ではなくて、ほかの被造物と最初から異なって天国を歩ける者でした。それが地獄に引き落とされたわけです。地獄に行く前に地獄の運命に捕らわれることになりました。一言で申し上げると、人間というのは地獄に引き落とされた結果、絶対解決不可能な滅びの運命に捕らわれて人生を生きることになったということなのです。つまり、地上にあるどんなもの、どんなにすごいものでも解決できない。人間がどれほど頑張って努力してもがいても、これっぽっちも解決にならないそういう不可能な運命を抱えて生まれて生きていく存在になりました。わかりやすい言葉で申し上げると、人間は生まれながら絶対幸せにはなることができない、不可能な存在として生まれて人生を歩くようになってしまいました。ここが分かるかどうかの問題です。それで霊的な後悔が何かが理解できます。霊的な後悔というのは、このような人間の真相、実情を全く知らないまま自分で努力して頑張れば幸せになるだろうと思っていたことを後悔するわけです。お金さえあれば生活が豊かに裕福になれば幸せになるだろうと思って、それを目指して頑張っていた、そこに希望を託していたことを後悔することです。それで本当に幸せになれるのでしょうか。それは人間が地獄に引き落とされたということを認めていないからでしょう。問題はクリスチャンでも一緒なのです。これを知らずにとにかく世の中で認められて成功すればどんどん発展さえ遂げれば良い社会、より良い人生、幸せな人生になると思って、それに希望を託して、それを自慢にしたり評価したりということの人生を歩いてきたことに対して後悔することです。クリスチャンの中でこのことを後悔する人を私は見たことがありません。特に偉い人、頑張る人、真面目な人間、頭の良い人、業績、実績がある人間こそ今の話は真っ正面から受け入れようとしません。教会に通いながらも。それはもう宗教なのです。人は地獄に引き落とされて世の中にあるどのような理論、どのような良いものでも救われることはできません。幸せになれません。人がどのように真面目に頑張って我慢してもがいても幸せとは一ミリたりとも縁がありません。それを知らないで、そういうところに希望を人生を懸けていたということに対して後悔することです。それを知らずに宗教にのめり込んでいたこと、それがわかっていれば宗教などはとんでもない何の役にも立たないと分かっているはずなのに、それも知らないで偶像に何かをお願いをして、偶像崇拝に走っていたということ等々、今まで私が幸せのために人生を頑張るというつもりで一生懸命走ってきたことに対して、それがすべて無駄なことだったんだと素直に認めることを霊的な後悔と言います。逆に言いますと、それとは正反対に自分の人生を振り返ってみると傷だらけでぐちゃぐちゃで暗いものばっかりだったということでダウンしていたこと、それも後悔することです。そういうことがあるからだめなのではありません。そういうことがないからハッピーでもありません。人間が地獄に引き落とされていることを知らないでいるので両方とも一緒なのです。それを後悔するわけです。誰かのせいにして、親が悪かったのでこうなりました。私はこんなにダメな人間ですよ。そういうこと全部、毎日、毎日、自分を叩きながら泣いていたこと、それは全部無駄なことなのです。それで何が変わるのでしょうか。根本的に何も変わりません。知らずにそういうことをやっていたことを後悔することです。「ああ、自分は無駄なことばっかりやってきたんだな。無駄なことに希望を託していたんだな」ということを後悔することを霊的後悔と言います。神様は人間がそのような存在、そういう状態だとご存知の上で人を愛して救いの道を神様自ら与えられました。人間には不可能なので。その道がキリストなのです。十字架にかけられて復活なさって、悪魔の頭を踏み砕いて、私たちの犠牲のいけにえとなられたイエス様こそがそのキリストなのです。だからイエス様はおっしゃいました。「わたしが道であり、真理であり、いのちなのです。わたしを通してでなければ、だれひとり父のみもとに来ることはありません」。神様がこの希望の道、福音を私たちに与えられました。なので霊的後悔というものは、今まで自分が正しいつもりでやってきたことは無駄なことだったんだな、余計なことだったんだというふうに素直に認めて、その無駄な道から立ち返ってイエス様の方に向かうことを後悔と言います。それを悔い改めると言います。霊的な後悔はイエス・キリストに向かうようになります。これが人間に求められることなのです。なぜなんでしょうか。このまことの後悔、霊的な後悔は、道徳的な良心的な後悔のようなものではなくて、この霊的な後悔はその人を新しく造り変えられる新しい創造の祝福につながるものなのです。今

までの人生、今も周りからはそれが正しい、そうすべきだと言われているすべてを無駄だとパウロのように全部ちリあくただったと認めて、神様が用意していらっしゃる唯一の希望の道、唯一の幸せの道、イエス・キリストに向かう、そこからＵターンする、そのときに初めてどんなに反省しても下すことができなかった重荷を下すことができるようになります。霊的な後悔によってすべての重荷を下ろして、負い目から自由になります。イエス様はおっしゃいました。「すべて、疲れた人、重荷を負っている人は、わたしのところに来なさい。わたしがあなたがたを休ませてあげます」と。ヨハネ 14：27 では、「わたしは、あなたがたに平安を残します。わたしは、あなたがたにわたしの平安を与えます。わたしがあなたがたに与えるのは、世が与えるのとは違います。あなたがたは心を騒がしてはなりません」。そのようなこの世は真似できない平安が与えられます。死の影の谷を歩いても大丈夫な平安が与えられます。霊的な後悔こそ過去どのような後悔せざるを得ないことがあったとしてもそれが負い目にならない平安が与えられます。ローマ８：2「キリスト・イエスにある、いのちの御霊の原理が、罪と死の原理から、あなたを解放した」。記憶には私たちの後悔せざるを得ない様々なしでかしたことなどが残るかもしれません。記憶というものだから。でも負い目にはなりません。なぜずっとクリスチャンなのに負い目を感じているのでしょうか。後悔の念に駆られるのでしょうか。クリスチャンでありながらも霊的な後悔をしていないからです。偉そうに良心的な後悔に自分を縛り付けているからです。それこそが人間らしいというふうに勝手に思い込んで。どこから教えられたのかわかりませんけれども。それは悪魔、悪霊には暗やみの勢力にはこれっぽっちも力になりません。霊の世界が今動いているわけです。道徳的な正しいか正しくないか、間違っているかそうでないなどあまりにもうるさい人は、実際はサタンにパンパンとやられるんです。弱いんですよ、その人は。自分なりには正直な人間、正しい人間のように頑張るんでしょうけれども。紙一枚より弱いのです。それでパウロも言いました。ガラテヤ 2：20、負い目を抱えて後悔の念に駆られるしかなかった、道徳的、良心的な後悔の限界に閉じ込められていた私は十字架とともに死んだ。今はキリストが私の内側に生きているよと。霊的な後悔はその人を根本から変えられていやすようにします。だからこそⅡコリント 5：17、古いものは過ぎ去り、すべてが新しくなった。その新しくなったというのは、創造の言葉なのです。創造は神の他にはできないことです。ヨハネ 1：12「受け入れた人々、すなわち、その名を信じた人々には、神の子どもとされる特権」が与えられ、3：5 で言われているように新しく生まれることができるようになります。イエス・キリストにあって、新しく生まれます。この言葉一つ一つの神秘的な霊的な意味を皆さんがちゃんと悟られて皆さんのものになることを祈りたいと思います。

なので後悔の念、重荷、負い目などを全部下ろして、だからこそ、このように聖書は私たちに訴えています。そういうことがくっついているからイエス、イエスと言いながらもイエスを見ることが実際はできません。そういうことを全部振り払って、霊的な後悔によって良心的、道徳的な後悔のゆえに背負っていた負い目など全部振り払って、信仰の創始者であり、完成者であるイエスから目を離さないようにイエス様だけに集中しなさい。現場で姦淫の罪を犯していた女の人に律法に基づいて石を投げようとしていた周りの人々が全部去ったあと、「彼らはそれを聞くと、年長者たちから始めて、ひとりひとり出て行き、イエスがひとり残された。女はそのままそこにいた」。その女の人と今までのすべてが全部取り払われてイエス様だけが残るように。それが霊的な後悔です。どんな大きな罪なのか。それはこちらの評価で、霊的な後悔、キリスト・イエスにあっては十字架ともにもう終わりなのです。良心的に道徳的にそんな簡単に忘れるもんかとささやいてもだまされないように。道徳的な良心的な後悔は世の中を維持するためにある程度必要かもしれませんけれども、霊的には何の役にも立ちません。霊的な後悔でないと。イエス様だけが残るように。

そこでやっとこのようになります。どのような過去があろうが、今現在どういう弱さがあろうが、それに囚われることなく、イザヤ 40：31 にあるように、「しかし、主を待ち望む者は新しく力を得、鷲のように翼をかって上ることができる。走ってもたゆまず、歩いても疲れない」。霊的に疲れてはいけません。心が疲れてはいけません。どんなに酷いことがあっても心が壊れてはいけません。イエスが私たちのために血を流されたので。霊的後悔により私の心を乱そうと騒がそうとしているすべてが全部消えてなくなり、イエス様だけを見あげてイエス様の内側にある御座の祝福を見上げるようになります。それを祈りと言います。みんなが霊的な後悔をしないので祈りができないのです。「まあ私、祈ってますよ」。それが祈りでしょうか。すべてを振り払って何ものにも囚われないで。何も気にしないで。なぜならイエス・キリストを見上げているから。それで御座の祝福だけを見るようになること

を祈りと言います。イエス様は最後に言いました。不可能な条件、状況、環境、状態の中で、それはあなたがたは知らなくてもいいよ。今までの常識で考えると、到底ありえない話なのです。御座の祝福知らない限りは。地上でどのような不可能なややこしい状況、厳しい険しい状況であっても、知らなくてもいいよ。なぜでしょうか。聖霊が臨まれると御座の力が約束されてるのであれば。御座と言うのは地上のものに制限されない、それを遥かに上回るという意味です。聖霊が臨まれると力を受けます。地の果てにまで証人となる。だから、何も変わっていないのに乞食みたいなもののまま、迫害の状況のまま、ローマの植民地のまま、ユダヤ教会は異端と言われているままなのに祈りに専念していたのです。こちらの方に行かないといけません。霊的な後悔はこの祈りの方に導くものなのです。それで神の国を体験するようになるでしょう。そのとき初めて自分を捨てることができます。私は神とともに歩いている者なんだ。自分のレベル、自分の基準、標準などでああだこうだというのは暗やみなんだねと。神の標準はなんだろう。神の知恵はなんだろう。神の力は、神の願いはなんだろうという方向に行くようになります。霊的な後悔がちゃんとできれば。この祈りにより新しい創造のわざが自分自身に、その人が関わっているところに現れて、神の国のわざが現われることを体験するようになるでしょう。これこそが勝利なのです。それで充分です。それ以前は皆さんのレベルでなんでだろうとか、文句を言ったりしていたのは全部間違いです。文句を言うためにはここまで体験してからやりましょう。御座を見てから。イザヤ預言者が天使に取り囲まれている、言葉で表現できない御座の栄光を見てから。それで自分は唇が汚れたものですよ。今まで自分で思って口に出していた、正しいと思って言っていたことは全部間違いですよということが分ったのです。御座の祝福を見たので。なのでいろいろあるでしょうけれども、霊的な後悔を契約として握って祈りに走り、御座の祝福を具体的に体験しましょう。神様は今も約束通りに老若男女すべて信じる人に水のように聖霊を注いでくださるとおっしゃったので私は信じます。皆さんに、皆さんが心配している子どもたちに聖霊が注がれると変わります。過去のどんなことでも、それを引きずって負い目を感じる後悔の念、それを捨てましょう。希望でない自分、肉、世中心だったこと、イエス様を知らなかったことを後悔して徹底的にイエス様だけを見上げる信者になりましょう。良心的また道徳的な後悔を全部下ろして、御座の祝福を求めて祈る信者になりましょう。

（祈り）
恵み深い父なる神様。イスカリオテ・ユダの残念な後悔を目の当たりにして、神様が望まれる本当の祝福の後悔、霊的後悔を正しく理解して、キリスト・イエスだけが残り、何ものにも引っかかることなく、御座の祝福を見上げる祈りの祝福の中に私たちひとりひとりを導いてくださり、神の国を見て体験するように祝福してください。イエス・キリストの御名によってお祈りいたします。アーメン